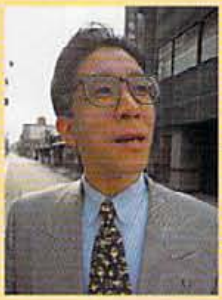
未来へ繋ぐこころ 知り標町

第四十六弾
～マコト君の“郷愁の路地裏・下京区忠庵町”編～

白塗の土塀。
焦茶色の板壁。
ガラス格子。
低くつづく瓦屋根の庇。
蚊取線香の匂い。
浴衣姿の男たち。
暮れゆく夏。
路地裏を駆けてゆく子どもたち・・・



市川　誠　MAKOTO ICHIKAWA

昭和二十四年九月十七日生まれ。京都市立有隣小学校、尚徳中学校、塔南高校を経て、滋賀大学経済学部卒業。昭和四十九年、市川甚商事（株）専務取締役に就任。平成元年、同代表取締役。現在、京都商工会議所青年部会長として幅広く活躍する四十六歳。

今は廃校になった小学校の前で。

社長室にて。

当時の町の模様を、ボードで説明する市川氏。

これは小学校のグラウンド。銀杏の大木はむかしのままだ。

当時を振り返りながら町を散策。

プールができて、当時よりすこし狭くなったという公園で。

懐かしそうに想い出を語る市川氏。

昔の風情を今に伝える家並み。

こんな路地が当時はたくさんあった。

路地にまつわる記憶はつきない。提灯屋の軒下には、ほそく、ふれればこわれてしまいそうな、紙を貼る前の提灯がたくさんぶらさがっていた。畳屋の前を歩けば、ふん、といくさの匂いがして、大きな針をもった畳職人が肘できゅっ、きゅっ、と畳を押さえていたものだ。竿竹売りの声。ドーン！と響くボン菓子売りの音。ロバのパン屋。思えば町かどにもさまざまな風物詩がたくさんあった。紙芝居も全盛で、いつも公園の北側にやってきた。

京都市下京区忠庵町。

当時、この町には祇園や上七軒、新町あたりの風情をうかがわせる家が建ち並んでいた。歴史的にいえば上京区は御所に勤める役人が多い町。中京区といえば商人の町。そして、下京区は職人が数多く住んだ町である。今も忠庵町周辺には数珠屋、裸屋、扇子屋、下駄屋、仏具屋、提灯屋など伝統的な品を扱う店が多い。材木店があるのは不思議だが、これは仏具店に木材が必要だったことの名残りである。

町には路地や袋小路も多く、夏になると子どもたちは肝試しをして遊んだ。どの路地にも夜になるとまるい傘のついた二〇燭くらいの裸電球がぽつぽつと灯るが、明かりを消せばあたりはまっくらになる。その奥に、布をかぶった年かさの子どもが潜む。年少組の子どもたちがこわごわ入ってゆくと、なにやらほの白い布をかぶったものが……うわーっ！とベソをかいて逃げてゆく幼い背中を、ゲラゲラ笑い声をたててゆれる、すこし大きな坊主頭たちがどこの路地にも必ずいた。

宵には路地に床几がならんだ。浴衣姿の男たちが、よくそこで将棋を指していた。どこかで、ちりりん、と風鈴が鳴り、蚊取線香の匂いにまじって夕餉の匂いも流れてきた。地蔵盆になると路地横のお地蔵さんに蝋燭がともる。そのきいろいあかりの中でわけもなくうきうきしたのを、今でもよくおぼえている。

テレビが各家庭に普及しはじめたのもその頃だ。木製で観音開きの扉を開けると、うやうやし

NED'S

BOARDING SPORTS

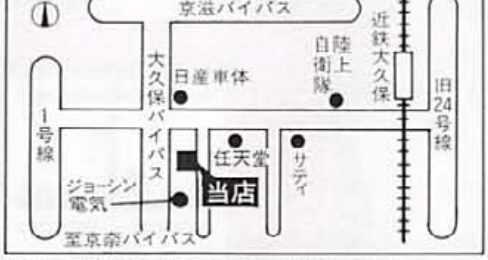
Surf/Skate/BodyBord

Body Board

※コンプリートセット ¥19,800～

Wear

※その他ストリートウェア多数あり



〒611 京都府宇治市大久保町旦椋130-10 安田ビル3F

TEL. 0774-44-3115

今でも、家の付近には、あの頃の気配が残る場所があります。なんとか、想い出の町並みをもう一度、よみがえらせてみたい。京に残る古きよき時代の風景を、次の世代へ伝えるための手助けができれば・・・

家の造作と一体化したお地蔵さまの祠。

く現れるブラウン管・・・力道山の空手チョップがうなり、月光仮面がラビットのスクーターで颯爽と走り回る。しばらくすると風呂敷をマントにした小さな月光仮面たちが、路地のあちこちで跳びまわるようになったのはもちろんだ。

町には、二〇坪ほどの町屋がぴっしりと並んでいたが、その家々にはたくさんの子どもがいた。朝の登校時間、路地という路地からあふれだす子どもたちの姿は壮観だった。今では、この町の有隣小学校も廃校となったが、一時はプレハブ校舎を増設しても追いつかないほどたくさんの生徒で溢れかえっていた。

ちかくの公園も地面がみえないくらい子どもがいた。野球をするときは、遠くのグラウンドまで出かけなければならなかった。だから近所ではビー玉、手のひらや空き缶の上で独楽をまわして、独楽のまわっている間だけ動き回れる鬼ごっこ、かくれんぼをよくした。みんな、限られた場所で上手にあそんでいた。

そんな町の様子が変わりはじめたのは、中学生のころだったろうか。内側はそのままで、まず道路に面した外がわの造作が新しくなっていった。白塗の土塀。焦茶色の板壁。ガラスのはまった格子。瓦屋根の庇。それらがコンクリートの洋風な造作でつぎつぎと覆われた。

変化は、町並の様子だけにとどまらなかった。高度経済成長、所得倍増計画が社会に影響を与えた当時、住んでいた職人たちがつぎつぎと町から姿を消した。昔ながらにつくる道具だけでは生計がなりたたなくなったのである。

そうして空家となった職人たちの家々は、ひとつの大きな空き地となり、やがてそこにはビルが建ちはじめた・・・

「自転車に乗って方々を走り回りましたが、あの頃は五条通りやその界隈も今とはずいぶん景色がちがいました。五条大橋も、松原大橋とおなじくらいの大きさしかありませんでした。今でいうなら車がぎりぎり離合できるくらいの幅しかなかったのですよ」

小学校の高学年になると、だんだん友達と自転車で町を出ることが多くなった。まだ草の茂みが残っていた鴨川。清水坂や山科あたりまで遠征することも度々だった。そうして体を駆けぬけてゆく風のむこうで、町はさらに変貌をとげた。気がつけば、もう子どもではなくなってしまった自分の瞳に、町屋が消え、子どもたちの姿が消えて、ビルが林立するわが町の姿が映っていた。いつのまにか祇園祭の山鉾も、町を通らなくなっている。

「今でも、家の付近をあるきまわれば、あの頃の気配が残る場所がいくつかあります。なんとか、想い出の町並みをもう一度、よみがえらせてみたい。今、京都に残っている古きよき時代の風景を、次の世代に伝えるための手助けができれば・・・」

この町で育ったかつての少年、市川甚商事株式会社社長の市川誠氏は、時折、そんなことを考えるのだという。

ちなみに市川氏の家族が忠庵町に移り住んだのは昭和二十六年、氏が二歳のときである。祖父はこのあたりの地主で、筆やブラシを商っていた。父親は戦後、プラスチック成型器で歯ブラシや台所用具を製造、ちいさいながら雑貨用品メーカーをこの町で興した。銀行などを相手に、今で云うノベルティ・グッズも手がけていたそうである。

すいません知ってこの町標

文／三村 澪・写真／大田 メグミ